

『源氏物語』論 — 「物語」という語をめぐる

岩 下 光 雄

I

『万葉集』に、「モノ」は「鬼」などと表記されている。祭りの庭で、「モノ」が語った話、さらに「モノ」を語った話、それらが物語の原態であり、そこに、第一次性物語から第二次性物語への転換、変容が、民俗信仰の零落を基層に なされていった。だから、物語は、神授の詞章の伝承を負いながら、その冒頭、末尾の表現に一定の様式・約束が見られる。物語の主人公は「モノ」としてオールマイティ、ある絶対性をその本性として持ち続けてきた。折口信夫・高崎正秀・三谷栄一博士らによる国文学の民俗学的研究の成果は、物語の基層に、そういう民俗信仰や型の伝承を考えてきた。

ところが、藤井貞和氏は、『源氏物語の始原と現在』（三一書房1972年4月）で、「ものがたり」の淵源が「かたりこと」であるにちがいない、という、誰によっても疑われていない前提に、「つながらない面、断絶があることにどうしても 思い到らないわけにゆかなくなる。」（同74頁）と鋭く指摘される。そして、土橋寛・三谷栄一博士らの「物語学」を批判された。それは、「物語学」の通念ともいべきものに對するきわめて挑発的、否定的発言ともいべきもののよう に思われる。「ものがたり」は、「正史に属する語りに對立する、正史でない語りだった」という。「モノ」は、「ものお

そろし」「モノ思ひ」などの語に見られるように、「輪郭のはんやりとした、理性的な説明のつかない動作や状態をあらわしている。」(同75頁)「語りというほどのものではない語り」を意味する語で、「源氏物語」の用語例も、そういう視座から理解し得るものだと述べられている。藤井貞和氏は、さらに、「物語文学成立史」(東京大学出版会 1987年12月)で、「フルコト・カタリ・モノガタリ」の副題を付され、次のように述べられている。以下、問題になるかと思量される論旨を抄出する。

物語文学は昔話的伝承の叙述形式にまみれてこの世に産み出されたのだ。(同、56頁)

モノガタリをモノガタリと見るか、モノガタリと見るかの対立である。「かたり」派と「もの」派との二つの潮流が研究の現状としてある。(同、633頁)

モノの大多数の用例は一般的な、今日に通用する、物象の意味や形式名詞的なそれであって、そのなかに交じってわずかに靈的存在を内容とする事例にぶつかるといふ程度である。といふことは、モノといふ語に本来的に靈的存在を示す意味があったかどうかについて、強い疑問をいだかないわけにゆかなくなってくる。(同、650頁)

モノといふ語が忌み詞として使われるという、まさにそのように使われることによってモノ_{II}靈的存在という意味を成立させるに至ったものと考えられる。

モノといふ語はあくまで存在一般を漠然とさしあらわすことのできる抽象度の高い言葉であった。(同、656頁)

靈的存在をそれとなく指し示してモノといふのは、忌避すべきモノを一般的、抽象的に表現したのであって、モノといふ語に本来的に靈的存在の意味があったわけではなからうといふ推定を試みてきた。(同、657頁)

モノガタリは正統的な言語的伝承に対してパロディ的位置にあらう、といふことになるかと思う。だからモノガタリは正統的な言語的伝承の世界に対して自由であり、かつ必ずしも自由でない。つまり、正統的な言語的伝承の

制約に対しては、モノガタリであるから、どのように語ろうとも自由である。モノガタリが雑談や会話、さらに男女の語らいのごときとりとめないものをそのように称してはばからないのは、モノガタリの自由性によるのではないかと思う。その一方に、つまり自由な語りに見合ったとりとめない内容が行われた一方に、神話や歴史叙述のような正統的な言語的伝承に対するパロディ的性格を有する伝承なり作品なりがあるとした場合、パロディであるから話型や語り方など形式的な面での限定があるうと十分に考えられる。そのような形式的限定が考えられるので、全面的に自由ではありえない。(同、700頁)

「物語文学成立史」について、その用語例を探りながら、帰納的、詳細に検討、論述される藤井氏の論証ではあるが、やはり、従い難いいくつかの問題点が存するように思量される。室伏信助氏(『王朝物語史の研究』角川書店 平成7年6月30日)も、次のように指摘されている。「ものがたり」ということばの発生と展開、その語義と用法、さらに表記と書き手の問題をめぐって、そこに一貫して、あるべきすがた―規範といったものから逸脱する方向性の中に、物語が発生する条件を探(同、10頁)られ、『万葉』巻七1287、巻十二2845番歌の語例は、「いずれも人と会って語ることによる、心のわだかまりを解き放つ作用をもつもの」(同、9頁)だという。

『万葉集』で「鬼」の字をモノと訓ませていることから、正統的な信仰対象としての「神」ではない霊的存在としてモノが考えられ、そのモノの語り、モノについての語り、あるいはモノが語る内容という意に解することができるならば、物語はもともと固有の伝承ではあっても、正統な伝承―氏族信仰の対象となりうるような伝承から逸脱した性格の伝承であり、さらには変形・歪曲をむしろ特色とする伝承や説話の類をも包括するものとして捉えることができるのである。気晴らしおしゃべりにまで用途を拡げる根底には、そうした無責任で気ままな、しかし、それがするために気を晴らすことのできる性格を發生的に担っており、その意を含めて広く用いられるようになって

たと思われるのである。(同、10頁)

室伏博士が「正統な伝承—氏族信仰の対象となりうるような伝承から逸脱した性格の伝承」と言われ、藤井氏が「正統的な言語的伝承に対してパロディ的位置」、「正史に属する語りに対立する、正史でない語り」と言われる立論には、「物語」についての用語例に対するある一つの共通する傾いた認識が存在しているように見られる。ところが、小林茂美氏(『源氏物語の表現機構』おうふう 平成8年3月22日)は、猿女の君氏の速賢献饌、隼人舞などの本縁を語る「記紀」の伝承に、「精靈」のうち克つ神の呪言に発する語り(同、202頁)の型を「ふんでいる」ことを指摘されている。折口、高崎学を継承する小林博士の立論ではあるが、また、検討を加うべき問題が存するようにも思量される。

「もの」を「鬼」「靈」「靈鬼」などと表記することは、戯書、戯訓というような類のものではなく、やはり、借訓の類に属すべきものと考えなければならない。この表記を、直観的にどう捉えるかが、実は用語例の検索、博搜という実証的な結論に深く関わることがらのように思われる。大修館『大漢和辞典』(修訂版)第十二卷「鬼」に、「㊦人を賊害する陰気、または現体。ものけ。ばけもの」として、「詩、小雅、何人斯」を典故として注記する。そして、「㊧」にも、姿が見えなくて禍難をもたらすものと信ぜられる人格の意、「易林、臨之第十九、兌」を典故として注記する。第十二卷「靈」には、「かみ」「㊨八方の神」、「㊩天神」「㊪雲の神」、「くしび」「すぐれて神妙なこと」、「たま。たましひ」「㊫」き人のみたま」、「㊬万有の精気。元氣」、「㊭人身の精気」、「㊮死者に冠する尊称」、以下二十五に及ぶ語意をあげ、典故を注記する。これらの語が、「もの」と借訓すべきものであったことが推定される。さらに、第七卷「物」に、「㊯鬼神」として、「漢書、武帝紀」などを典故として注記する。漢籍を典故として、これらの語例を「モノ」と借訓することはきわめて自然で、可能なことであったと推定しなければならない。『大漢和辞典』は、「物語」について、次のように注記している。

【物語】モノリ ●はなし。談話。(萬葉集、七) 近江あがたの物語せむ。●はなしの次第を記した草紙。ものがたりほん。ものがたりぶみ。「枕草子、四」物語りしふなど書き写す。(第七卷 637頁)

漢籍に「物語」の語例を探し得ない、出典としてあげ得ないことを示している。室伏博士らが指摘される「万葉」巻七、一二七番歌「淡海県物語」は「柿本人麻呂歌集」の施頭歌である。このことは、人麻呂の歌語の造語という視点から捉ええると、「物語」の語もやはり人麻呂の造語、創始に深く関わるものではなかったかと憶測することが出来ないだろうか。人麻呂の和歌史的役割、意義、それを境とする施頭歌の衰退、造語意識、そういう視座から「物語」の語を捉え直していくと、きわめて示唆的な論点を、国語史のなかに確立し得るといふ事實は、やはり、偶然のことからではなかった、という気がしてくる。巻十二、二八四五番歌「正述心緒」の歌「語」の一字を「モノガタリシテ」と訓んできた。この歌もまた「柿本人麻呂歌集」の歌なのである。憶測を重ねていくことになるが、この語の背後には、やはり、「人麻呂的」造語意識と創始とが、深く関わりあっていたように思われる。室伏信助博士(『王朝物語史の研究』)は、平安時代の物語は、それこそ気散じのためのおしやべりといったものから、特定の内容を書き記した作品としての物語まで、数多くの「ものがたり」の用例が見出されるが、物語そのものの語義については、なかなか明解を得ない。(同9頁)

と指摘されている。氏はさらに、

正統な氏族信仰の対象としての伝承から逸脱した伝承が、その内容にふさわしい「ものがたり」という名称を獲得し、さらに漢字の規範性からこれまた逸脱した「かな」という表記と結合して、ここに物語が大きく姿を現すことになる。しかも、その物語は今日知られる限り、初期の作品は例外なく作者が男性であったといふことは、本来、公的世界に漢字を表現手段として生きる男性の、これまた疑いなき逸脱でなくてはならない。(同10頁)

と、「規範といったものから逸脱する方向性の中に、物語が発生する条件を探」(同11頁) ろうとされている。万葉仮名や、宣命書きは、確かに漢字を用いて国語を表記したものはあるが、中国語と日本語との間に存在する言語の相違を自覚しながら表記しようとしたもので、漢文による表記を引き込みながら、それと対偶させて表現しようとする意識が、また、存在していた。万葉仮名として表記された「物語」「語」という「ものがたり」の語は、漢籍にその出典を探し得ない語であるとすれば、それは、国語としての語彙を祖形として意識するものであったと考えなければならぬ。漢文表記、漢文的表記を主体とする典籍のなかに、この語の使用が見られないことを、「ものがたり」の発生という歴史的發展のなかに関わらせていくことは、妥当な論理とはいえないように思われる。藤井貞和氏の立論の前提、その基底に対する問題は、やはり、そこにあると思量される。

「日本霊異記」や「今昔物語集」の各説話のタイトルには、それぞれ、「縁」、「語」の漢字が当てられている。「霊異記」は、正格、華麗な熟達した貴族的漢文ではなく、変体漢文で表記されている。そこに、「霊異記」の享受と本質とに関わる問題が存在する。「記」と称されることには、「冥報記」「金剛般若経集験記」の流れを引くものであることを示す。奇譚意識、規範意識、現報、表相意識に貫かれた作品と考えられてきた「霊異記」の説話のタイトルが、「縁」であることは注意すべきである。各説話の文末表記は一定していないが、「(豈)・・・や」、「事なり」、「謂ふなり」などの表記には、説話の方法、主題と、それは深く関わっている。また、それは、「本縁譚」「因縁譚」というような唱導性、説話性とも深く関わるものでもあった。「日本霊異記」(岩波書店 日本古典文学大系25頁)などに指摘されている「金蔵要集論」、「諸経要集」など、引用したり、依拠したりした漢籍の章立て、標題との直接的関係を考えるべきではあるが、「縁」の語が、漢文的表記のなかで「物語」、「語」などに代入され得る内容のもの、それに相当するものであったことも、また事実である。それは、また、「物語」の語が、漢文的表記、文体のなかで、適切さを欠く、不相応な語

彙であったことを示してもいるように思われる。岩波「大系本」は「縁」を「えに」(同、59頁)と訓釈する。小学館「古典文学全集本」は、現代語訳で「話」と言い換えている。「大漢和辞典」(大修館)には、「曰」として「①ふち、へり」「②くへり」「③ふちどる」「④かざる」「⑤」として「①よる ②ちなむ ③したがふ。④よぢのぼる。」「⑤へる」「⑥まとふ。めぐらす」「⑦えにし。ゆかり。ちなみ。」「⑧おもて」「⑨すたる。すてる。」「⑩衣のかざり」「⑪心識が外界に向かつて動き、認知するをいふ」「⑫夫人の衣服の名」「⑬邦 えん。えんがはの略称」「⑭名乗」マサ。ムネ。ヤス。ヨリ。ヨシ。」とある。「①」「②」「③」「④」「⑤」などに関わる語で、直接的に「話」の語意はないように見られる。ところが、「靈異記」「上巻第一」の巻末に「所謂古時名為雷岡語本是也」(「大系」66頁)とある本文は、「所謂古京の時に名づけて雷の岡と為ふ語の本是れなり」(「大系本」)、「全集本」では、「古時」と訓釈されている。「今昔物語」の各説話のタイトルにつけられているこの「語」という漢字は、「こと」と訓まれてきた。「大漢和辞典」(大修館)には、「①」かたる。②論難する。意見をたたかはず。③こたへる。④とく。⑤はなしあふ。⑥いふ。⑦ことば。⑧はなし。⑨かたり。⑩もんく。成句。成語。⑪ことわざ。たとへのもんく。⑫ことばつき。⑬ことゑ。禽虫の鳴声。⑭さとす。⑮喜ぶさま。⑯論語の略。⑰二百六韻の一。上声第六。⑱つげる。⑲をしへる。とく。⑳困。㉑かたらひ。㉒談合。約束。㉓姓氏。㉔かたらふ。相談する。徒党に引き入れる。㉕かたる。節をつけて読む。㉖「名乗」カタ。コト」とある。「①」②③④はなし。ものがたり。の出典には、『漢書 司馬伝』の「僕以口語、遇遭此禍」を出典として示す。熟語としての語例で、しかも口に出して言うことは、話しことばによるかたりを意味する用語例と言える。漢籍の語例が、古い用例として、そういう用い方をしていたという事実は、もう少しこの語の語意として注意されてよいことのように思われる。それは「特定の内容の物語を相手に語る」という捉え方では、捉えきれない問題を含んでいる。『靈異記』上巻第一の「語」の語意も、そういう捉え方をすることによって、古代地名伝承、起原

説として、正面に据え直すことができるのではないだろうか。藤井貞和氏、室伏信助博士らの立論の基層には、そういう語意、語例に対する認識が、やはり、明確になされていない視点に問題がある。最古の用例かとされる『万葉』の二例も、やはり、そうした視座に立って考えることができる。以下述べるように、小学館『日本国語大辞典』〔④〕の意味だけに限定することには問題がある。

〔源氏〕に用いられている「物語」「御物語」、その複合動詞などの用例は、以下示すように、百数十例に達する。勉誠社「総索引」に、資料番号を付して示す。上段は「大成」の巻名、頁数、行数。下段は、岩波「大系」本、小学館「全集」本の巻数、頁数をそれぞれ示したものである。

- (1) 帚〇〇四二〇 に侍しとき女房などの物かたりよみしをききて 一〇六五 一四四
- (2) 帚〇〇五二三 中将なにかしはしれものの物かたりをせむとていと 一〇六六 一五七
- (3) タ〇二〇八〇五 てなとそありけるくにの物語など申すにゆけたは 一〇三三 一三九
- (4) タ〇二三四四 てふときえうせぬむかしの物かたりなどにこそかかる事 一四九 一四四
- (5) タ〇二七〇八 てのとやかなる夕くれに物語などし給てなをいと 一四四 一五七
- (6) 紫〇二七〇九 こともうちかすめ山みちのものかたりをもきこえむ 一四〇 一三〇
- (7) 葵〇三三二〇 かきりの人人御まへにて物語などせさせ給中納言の君 一四八 二〇五
- (8) 葵〇三三九〇 なときこえ給て日ころの物かたりのとかにきこえ 一三五 二〇六
- (9) 賢〇三七〇三 はやすからすおほすへしものかたりにことさらに 一六一 二〇六
- (10) 須〇三九〇八 人人御まへにさふらはせ給てものかたりなどせさせ給人 二〇五 二五九
- (11) 須〇四二一五 きこえてなこりもあはれなるものかたりをしつつひと宮の 二〇八 二七五

- (12) 須〇四九〇五 一二三日すゑさせ給てかしこのものかたりなとせさせて 二〇五 二二八六
- (13) 潘〇四四〇二 思あかれりきき所ある世の物かたりなとしておととの君 二二三 二二八五
- (14) 蓬〇五三〇一 給ふはかなきふるうたものかたりなとやうの 二一四 二二三〇
- (15) 蓬〇五八〇三 ぬ御あはひにてかひなき世のものかたりをたにえ 二一四六 二二三七
- (16) 蓬〇五七〇四 におとろへしよのものかたりもきこえつくすへき 二一五七 二二四一
- (17) 絵〇五四〇五 むめつほの御かたはいにしへのものかたりなたかくゆゑある 二二七六 二二三九
- (18) 絵〇五四〇四 をおかしときこしめしてまつものかたりの 二二七九 二二三〇
- (19) 薄〇三九〇三 てちかく人人さふらはせ給てものかたりなとせさせ給かう 二二四四 二二四四
- (20) 少〇六六〇一 きこえ給をまめたちて物かたりなときこえ給ついで 二二五七 二二四一
- (21) 玉〇七六〇四 もかたしけなき事なりとて物かたりいとせまほしけれと 二二四九 二二〇五
- (22) 玉〇七三〇三 る大とこのはうにおりぬものかたり心やすくとなる 二二三 二二〇七
- (23) 玉〇七四〇五 おもひしつみつるをこの人のものかたりのつゐてに 二二三五 二二二
- (24) 玉〇七三〇一 もいまそかのありし昔のよの物かたりきこえて給ける 二二三二 二二二九
- (25) 初〇七三〇二 すおほかたのむかしいまの物かたりをし給てかはかり 二二八八 二二五一
- (26) 螢〇八三〇三 はこなたにおほとこのこもりぬ物かたりなときこえ給て 二四〇六 二一九
- (27) 螢〇八二〇三 もむなしからすなりぬやとものかたりをいとわさとの 二四三三 二二〇五
- (28) 螢〇八二〇四 かやうにしほうなるしれもの物語はありやいみしく 二四三三 二二〇五
- (29) 螢〇八二〇六 よにあらしないさたくひなきものかたりにして世に 二四三三 二二〇五

- (30) 螢〇八九〇一 の御あつらへにことつけて物かたりはすてかたくおほし 二四四 三二〇
 螢〇八九〇七 の御まへにてこのよなれたるものかたりなとよみきかせ 二四五 三二〇七
- (31) 常〇八九三 こととてうちいてきこえむものかたりもおほえねは 三〇三 三二六
- (32) 行〇八九二 にすくれ給へる御ありさまを物かたりにしけりおととも 三〇〇 三二五七
- (33) 裏〇二〇二 ましくやとなつかしうの給て物語などし給これもうちとけ 三一九 三四三
- (34) 裏〇二〇四 しよの御おさなさの物語などし給に戀しきこと 三〇三 三四八
- (35) 上〇二〇九 つけてもうちうちさるへき物かたりなどのついても 二二六 四〇七
- (36) 上〇二〇四 ぬやうにいとけはひおかしく物かたりなどし給つつ 三二四 四〇五九
- (37) 下二六三 なりける女御御方にまいりてものかたりなときこえ 三三九 四一四七
- (38) 下二六〇 よゐめしたまひてひとひとに物かたりなとよませてきき 三三二 四二〇三
- (39) 柏三〇九〇 ほとよりはおすけて物かたりなどし給おとと 四〇六 四三〇
- (40) 霧三三二〇六 少将の君なとさふらふ人々にものかたりなどし給てかう 四〇九 四三七
- (41) 霧三三九〇 てさまやうのとやかなる物かたりをそきこえ給ふ 四〇六 四三九七
- (42) 霧三三三〇六 かくすたくひこそはむかしのものかたりにもあめれとさ 四一九 四四〇
- (43) 霧三三四三 もひきいて給はぬほとになをものかたりなときこえて 四二四 四四二八
- (44) 幻四四〇四 つれつれなるままにいにしへの物かたりなどし給おりおりも 四二六 四五〇八
- (46) 橋二五五三 つれつれとのみすくし侍よの物かたりもきこえさせ所に 四三七 五二五
- (47) 橋二五三〇六 にたてまつりかへつおい人の物かたり心にかかりて 四三三 五二四

- (48) 推二五四〇一 給て此たひは心ほそけなる物語いとおほく申給なからむ 四三四六 五二七一
- (49) 推二五三六〇六 めしいててのこりおほかる物かたりなとせさせ給 四三四九 五二七四
- (50) 推二五三六〇八 けさうひてはあらず心ふかう物かたりのとやかにきこえつつ 四三四九 五二七四
- (51) 総二五三二〇六 てとにかくにさためなき世のものかたりをへたてなくきこえ 四三八七 五三〇〇
- (52) 総二五三二〇七 きこえすこよひはとまり給てものかたりなとのとやかに 四三八八 五三〇三
- (53) 総二五四〇三 とをくもてなしてしめしめどものかたりきこえ給うちとく 四三八八 五三〇三
- (54) 総二五四七二四 たるなりけりをのかししの物かたりにかの宮の 四四四七 五二九九
- (55) 総二六五〇三 ける人々ちかくよひいて給て物かたりなとせさせ給けはひ 四四六六 五三三三
- (56) 宿二五三二〇一 事はみるかひあれはものかたりなとにまつ 五〇六五 五四〇五
- (57) 宿二五三九〇六 におなし心なる人もなきものかたりもきこえんとて 五〇六五 五四四三
- (58) 宿二七六六二 るもあはれなれはれいよりはものかたりなとこまやかに 五二二四 五四六七
- (59) 宿二七六六二 けるにやあらむあま君はものかたりすこししてとく 五二二五 五四八一
- (60) 東二七四三三 つつこしおれたるうたあはせ物かたりかうしんをし 五二二三 六〇三三
- (61) 東二八六〇三 もなくさみ侍など年ころの物かたりうきしまのあはれなり 五一五五 六〇三三
- (62) 東二八七二四 おはしたるなめり例の物かたりいとなつかしけに 五一五六 六〇四六
- (63) 東二八三二〇一 はち給はねはみあたりける物かたりいとなつかしくし給 五二七四 六〇五五
- (64) 東二八三三〇六 におもひあつかはれ給ふものかたりなとし給て 五二七五 六〇六七
- (65) 浮二八九二二 うちもおかすみ給女みやにものかたりなときこえ給ての 五二四五 六二五三

- (66) 蜻二五三一〇 ぬをもとめさはけとかひなし物かたりのひめ君の人に 五三七 六一九
- (67) 蜻二五四一〇四 うちまもり給やうやうよの物かたりきこえ給にいとこめ 五二九 六一〇九
- (68) 蜻二五七一〇九 あるその事となけれとよの中の物かたりなとしつつ 五三〇 六一四五
- (69) 蜻二五七一〇二 つほねなどにたちより給へし物かたりこまやかにし給て 五三一 六一四六
- (70) 蜻二五七一〇三 たるとくちに人々あまたるものかたりなとする所に 五三六 六一五五
- (71) 手二九六六〇六 なりとてとふらひいてくるも物語などしていふをきけは 五四九 六一七七
- (72) 手二〇〇八〇七 いにしゑ思いてつつさまさま物かたりなとするにいらふ 五六〇 六一二九
- (73) 手二〇〇八〇三 のふりいつるにとめられて物かたりしめやかにし給 五六一 六一九四
- (74) 手二〇二一〇五 あそひ給せむしの君こまかなる物かたりなとするつゐてに 五三六 六一五九
- (75) 手二〇三一〇二 いやめにあま君は物し給物かたりのつゐてにしのひ 五三七 六一〇〇
- (76) 手二〇四〇〇五 とおほしなせはかなき世の物かたりなともきこえて 五四二 六一四一
- (77) 手二〇四七〇六 なんありけると大方の物語のついでにそうつのいひ 五四〇 六一五二
- (78) 手二〇四七〇九 とみたてまつる立よりものかたりなとし給ふつゐて 五四二 六一五三
- (79) 夢二〇六一〇八 とかありし人の世の物かたりすめりし中になん 五四〇 六一三七
- (80) 夢二〇六九一〇 たまへりあるしそのこきみに物かたりすこしきこえて 五四四 六一三七
- 次に「御物語」の語例は、次のごとくである。資料番号〔77〕以下には、「物語」、「御物語」の複合語、複合動詞なども含め付記する。
- (1) 帚〇〇三二〇 み木丁へたてておはしまして御ものかたりきこえ給を 一〇八七 一一六八

- (2) 紫〇二五九二二 おほすかくこもれるほどの御物かたりなときこえ給て 一三八八 一八五
- (3) 紫〇一六〇五五 へかめり僧都世のつねなき御ものかたりのち世の事など 一八八 一八六
- (4) 紫〇一六九一〇 うちにまひり給て日ころの御ものかたりなときこえ給 二二〇〇 二一九九
- (5) 賀〇四二〇五五 おもへとしつめておほかたの御物かたりきこえ給ふほとに 一三七七 一三九〇
- (6) 賀〇四二〇八八 おほえ給てこまやかに御物かたりなときこえ給宮も 一三七七 一三九〇
- (7) 宴〇七五〇三二 こそうしろめたけれ日ころの御ものかたり御ことなど 一三〇九 一四三二
- (8) 葵〇三〇九〇四 はつねにまいり給つつ世中の御物かたりなとまめやかなるも 一三四四 二〇四七
- (9) 賢〇三四〇五五 こなたにまいり給てふるき御物かたりきこえ給おまへの 一三七八 二〇九一
- (10) 賢〇三六〇一四 ほとにてむかしいまの御物かたりきこえ給御かたち 一三五五 二二二五
- (11) 賢〇三六一〇五 させ給はさりけるよろつの御物かたり文の道の 一三五五 二二二六
- (12) 散〇三六九〇三 女御の御かたにてむかしの御ものかたりなときこえ給に 一四四九 二二四八
- (13) 須〇三九八一〇 こまやかにきこえ給むかしの御ものかたり院の御事 二〇二四 二二五八
- (14) 須〇三九九〇六 むかたなくなむなとおほくの御ものかたりきこえ給 二〇二五 二二五九
- (15) 須〇四〇四〇四 なりみこはあはれなる御ものかたりきこえ給て 二〇二二 二二六五
- (16) 須〇四〇五〇一 月をみておはすまたここに御物かたりのほどにあけかた 二〇二二 二二六七
- (17) 須〇四〇七二三 給かたみに心ふかきとちの御ものかたりはよろつあはれ 二〇二四 二二七〇
- (18) 須〇四二二〇三 ておほすその日は女君に御ものかたりのとかに 二〇二六 二二七七
- (19) 須〇四三三二 いつしかさふらひてみやこの御ものかたりもとこそおもひ 二〇四二 二二九八

- (20) 須〇四三〇三 すこしうたひてつきころの御ものかたりなきみわらひみ 二〇五〇 二二〇六
- (21) 明〇四六〇五 すみまさりしつかなるほとに御物語のこりなくきこえて 二〇七三 二二三四
- (22) 明〇四七七一 おほつかなく思ひつるこよひの御物かたりにききあはすれば 二〇七五 二二三六
- (23) 明〇四七六一〇 すこしよろしうおほされける御物かたりしめやかにありて 二〇九四 二二三三
- (24) 濡〇四九〇五 すこけにておはす女御の君に御物かたりきこえ給て 二二二五 二二八七
- (25) 絵〇五六一四 おととのまいり給へるに御物かたりこまやかなり 二二七五 二三六四
- (26) 松〇五八九〇一 かたちねひまさりてつきころの御ものかたりなとなれ 二二〇一 二二四〇
- (27) 松〇五九六〇八 なむけちかうちしつまりたる御物かたりすこしうちみたれて 二二〇〇 二二四二
- (28) 松〇五九七〇二 うちやすみ給ふ山さとの御物かたりなときこえ給ふ 二二二〇 二二四二
- (29) 薄〇六五〇三 まいりて心のかにむかしの御物かたりもなと思ひ給へ 二二三八 二二四四
- (30) 薄〇六三三〇三 つとさふらひ給ふしめやかなる御物かたりのついでに世は 二二三五 二二四三
- (31) 朝〇六三九〇八 宮たいめむしたまひて御ものかたりきこえ給ふいと 二二四九 二二六〇
- (32) 朝〇四四〇〇四 もまいりていにしへの御物語をたにきこえ 二二五〇 二二六〇
- (33) 朝〇四八〇〇六 いら給ふ宮の御かたにれいの御物かたりきこえ給ふに 二二五九 二二七七
- (34) 朝〇六五六一三 思ひはへるなとむかしいまの御物語に夜ふけ行月いよいよ 二二六九 二二八四
- (35) 少〇六七〇五 人なりとそきき侍なとかつ御ものかたりきこえ給女は 二二六七 三〇二九
- (36) 玉〇七五〇〇六 にもあらしをとしころの御物かたりなときこえまほしき 二二三七 三二三四
- (37) 初〇七六〇〇七 けりこまやかにふるとしの御ものかたりなとなつかしう 二二三〇 三二四一

- (38) 胡〇七〇六 二人はこまやかなる御ものかたりにかしこまり 二四二 三二七
- (39) 野〇八七〇六 などまいりてのとやかに御物かたりなときこえ給ふ 三〇三 三二七
- (40) 行〇六七三 いまのことともしころの御物かたりに日くれゆく 三〇八 三二九
- (41) 真〇五八〇七 けるやうやうこまやかなる御物かたりになりてちかき 三二〇 三三四
- (42) 裏〇二〇八 給ものまめやかにむへむへしき御ものかたりはすこしはかり 三二八 三四九
- (43) 上〇三六〇 めてたければとし比の御物かたりこまやかに 三三三 四〇三
- (44) 上〇二六〇五 をみすのうちにめしいて御物かたりこまやかなり 三三四 四〇五
- (45) 上〇四六〇 給ひつづいにしへいまの御物かたりいとよはけに 三三四 四〇四
- (46) 上〇三〇〇三 すきにしかた行ききの御物かたりきこえかはし給院 三三六 四〇四
- (47) 上〇四一三 けさやかなるへたでもなくて御物かたりきこえかはし給 三三四 四〇五
- (48) 上〇三三〇二 らるなこりおほくのこりぬらん御物かたりのとちめはけに 三三三 四〇七
- (49) 上〇七六〇二 すかなしとみたてまつり給御ものかたりなといと 三三六 四〇八
- (50) 下二二六〇三 ぬうへはとまり給て宮にも御ものかたりなときこえ 三三五 四一九
- (51) 下二八六〇六 しよりも思ふとちの御物かたりのついでに 三三二 四三七
- (52) 下二五〇〇九 ひるのおましにうちふし給て御物かたりなときこえ給ほと 三三九 四三九
- (53) 下三三〇三 をはそかせ給てしつかなる御物かたりのふかき御ねかひ 三四三 四二七
- (54) 横三三三〇 へわたり給ぬれはのとやかに御ものかたりなときこえて 四〇七 四三五
- (55) 鈴三〇〇三 は中宮の御方にわたり給て御物語なときこえ給ふいまは 四〇七 四三七

- (56) 鈴三〇一四 にそへてわすれぬむかしの御物語なとうけ給はりきこえ 四〇八七 四三四
- (57) 御三六〇七 とたえをめぐらしくおほして御物かたりこまやかにきこえ給 四二七六 四四六
- (58) 幻四三三〇 中将の君などおまへちかくて御物かたりきこゆひとりねつね 四一九七 四五〇
- (59) 幻四三三三 夜ふくるまてむかしまの御物かたりにかくてもあかし 四二〇六 四五二
- (60) 竹四七三 へたててむかしにかはらす御ものかたりきこえ給 四二五六 五〇五九
- (61) 竹四七四 なりにて侍れはいにしへの御物かたりもきこえまほしき 四二五六 五〇五九
- (62) 竹四八四 にわたり給てかんの君は御物語なときこえ給夜ふけて 四二七七 五〇八五
- (63) 橋二五七〇 しのふれとあはれなるむかしの御物かたりのいかならむ 四三三八 五二六
- (64) 橋二五七〇 給へりれいのさまさまなる御物かたりきこえかはし給ふ 四三三五 五二五
- (65) 総二五七〇 ききわたさるつねなきよの御物かたりに時時さしいらへ 四三九二 五三三
- (66) 総二六三〇 かうらんによりみ給て世中の御ものかたりきこえかはし給ふ 四四二〇 五二四九
- (67) 総二四四〇 なり御木丁はかりへたてて御物かたりきこえ給かきりも 四四四三 五二五
- (68) 早二六〇七 たまふへくもあらずつきせぬ御物かたりをえはるけやり 五〇二四 五三四〇
- (69) 早二六四〇 とみたてまつり給つきせぬ御ものかたりなともけふは 五〇一九 五三四五
- (70) 早二六五〇 と心をまとはしたまふとちの御ものかたりにおり 五〇二〇 五三四六
- (71) 早二六五〇 所思きこえ給けるなにくれと御物かたりきこえかはしたまひ 五〇二七 五三七
- (72) 宿二七七三 うけたまはらまほしき世の御ものかたりも侍るものと 五〇七一 五四三
- (73) 宿二七五〇 のあさきりにまとひ侍つる御ものかたりも身つからなん 五二〇二 五四一

- (74) 蜻_二五_{一〇} すむねいたく思宮はうちの御物かたりなとこまやかに 三三八 六二五
- (75) 手_二四_〇六_〇 むなといひつつく心ふかからむ御物かたりなとききわくへく 五〇四 六三一
- (76) 手_二四_〇五_〇 り御まへのとやかなる日にて御物かたりなときこえ給 五四〇 六三〇
- (77) 絵_〇五_七一〇三 なとまいるついでにむかしの御ものかたりともいてきて 二八五 二七九
- (78) 行_〇八_九一〇一 ことともなれはいとあはれなり御物かたりともむかしいまの 三〇五 三二〇
- (79) 上_二八_三三 いみしきねともいつむかしの御ものかたりともなといてき 三二七 四〇三
- (80) 御_二三_六三_三 てこころふかけにしつまりたる御ものかたりともきこえかはし 四一七 四四七
- (81) 椎_二五_八〇_一 むかし今をかきあつめかなしき御ものかたりともきこゆ 四三二 五一〇
- (82) 早_二六_七三_二 よき御あはひなりこまやかなる御物かたりともになりては 五〇四 五三三
- (83) 宿_二七_八〇_七 もあはれにこそなとむかしの御ものかたりともすこしきこえ 五一〇 五四五
- (84) 横_二三_七四_〇 たいめんし給てむかしの物かたりともきこえかはし給 四〇六 四三四
- (85) 玉_〇七_四一〇 かはらて待ければそのよの物かたりしみて侍て 二五八 二二五
- (86) 帚_〇七_六〇_七 てけしきはめるをやなとものかたりし給ていつかたに 一〇九 一七三
- (87) 夕_〇三_三〇_八 てとのかたにほうしはら二三人物語しつづわざとのこゑたて 二六〇 二五二
- (88) 上_二二_七〇_八 ひとつ車にてみちのほと物かたりし給猶このころの 三三〇 四二七
- (89) 上_二二_七二_二 をのをのわかるるみちのほとものかたりしたまふて宮の 三三二 四二七
- (90) 下_二二_八〇_三 とものけにむかひてものかたりし給はむも 三三二 四三六
- (91) 柏_三三_〇〇_九 てしのひやかにこのひしりとものかたりし給おとなひ給へ 四〇五 四二八

- (92) 柏三三〇九 いたしたまはすいとなに心なう物かたりしてわらひ給へる 四〇三九 四三三四
- (93) 霧三七四〇九 ていたしたまうつ少将は人人ものかたりして時々さふらふ 四一六八 四四七三
- (94) 橋二五四一〇 をもかへぬなとへたてなく物かたりし給このあさは 四三〇五 五一一九
- (95) 宿二七六〇二 しろくうつくしくてたかやかにものかたりしうちわらひなと 五一二四 五四六七
- (96) 東八四一〇七 てすたれつまひきあけて物かたりし給ふ木丁に 五二八四 六〇七八
- (97) 浮八五九三三 こゑひきししめかしこまりてものかたりしけるをいらへも 五二三八 六一四四
- (98) 浮八五九〇七 と思てこのたいふとそものかたりしてくらしける 五三三九 六一四五
- (99) 手二〇二一〇四 僧都もめつらしかりて世中の物語し給ふその夜はとまり 五三六六 六二九八
- (100) 上二〇三一二 はまいりたるにあひて物かたりするついでにうへ 三三三二 四〇三三
- (101) 蜻二九七〇三 のさすかに人に心ととめて物かたりするこそ心ちをくれ 五三三〇 六二四四
- (102) 蜻二九七〇三 とてこのわた殿にうちとけてものかたりするほとなりけり 五三三三 六二五〇
- (103) 桐〇〇六〇五 の女房四五人さふらはせ給て御ものかたりせさせ給なり 一〇三九 一一〇九
- (104) 梅〇九六〇一 なとまいりてむかしの御物かたりなとし給かすめる 三二五五 三三四二
- (105) 上二二二〇六 まいり給へりおとといて給て御物かたりなとし給しつかなる 三三〇四 四二三八
- (106) 上二二二五三 給ぬ宮もるなをり給て御物かたりし給つきつきの 三三〇九 四二五五
- (107) 幻二四七〇一 をおまへちかくてかやうの御物かたりなとし給 四一九九 四五三二
- (108) 夢二〇五〇七 ことともてさはききこえ給御物かたりなとこまやかにし 五四七 六三五九
- (109) 紫〇二七〇六 少納言はこれみつにあはれなるものかたりともしてありへて 一一三三 一一三四

「物語」の辞書的な意味は、「大漢和辞典」（大修館）については既に引用したように、二つの意味に分類されていた。岩波「広辞苑」第四版には、そのほか「③」として、以下引用する「日本国語大辞典」（小学館）の「⑥」の意味をあげている。引用が長くなるが、以下、同書第十九卷³³⁹頁「ものがたり」の項を引く。

ものゝがたり【物語】（名）①（一する）種々の話題について話すこと。語り合うこと。四方山（よもやま）の話をすること。*書紀—皇極元年四月（岩崎本訓）「親ら対ひて語話（モノカタリ）す」*宇津保—俊蔭「そこに仲純の君おはしければ、対面して御物がたりし給ふ」*平家—七・篠原合戦「高橋うちとけて物語しけり」②（一する）特に男女が相かたらうこと。男女が契りをかわしたことを婉曲にいう。*宇津保—俊蔭「あやしく、などか御様の例ならずおはします。もし人ちかく御ものがたりやし給し」*浮世草子・好色一代女—二・四「男あひ見る心して幾度かくり返して後、独寝の肌を抱ていつとなく見し夢に、此文みづからが面影となり夜すがら物語（モノカタリ）せしを」③（一する）幼児が片言やわけのわからないことを言うこと。*枕—一四〇・つれづれなぐさむもの「また、いとちひさきちこの、ものがたりし、たがへなどいふわざしたる」*源氏—紅葉賀「物がたりなどして、うちあみ給へるが、いと、ゆゆうしう美しき」④（一する）特定の事柄について、その一部始終を話すこと。またその話。特に口承的な伝承、また、それを語ることを言うことがある。*万葉—七・一二八七「青みづら依網（よさみ）の原に人も逢はぬかも石走る淡海県の物語（ものがたり）せむ（へ人麻呂歌集）」⑤日本の文学形態の一つ。作者の見聞または想像をもととし、人物・事件について人に語る形で叙述した散文の文学作品。狭義には平安時代の作り物語・歌物語をいい、鎌倉・南北朝時代その模倣作品を含める。広義には歴史物語、説話物語、軍記物語などという。作り物語は、伝奇物語、写実物語などに分ける。ものがたりぶみ。*宇津保—楼上下「おとな、わらは、き丁そばめつつ、物がたりよみ、あそびしためり」*観智院本三宝絵—上「又物語と云て女の御心をやる

物也」*源氏一螢「ものがたりを、いと、わざとの事に、のたまひなしつ」⑥浄瑠璃・歌舞伎で、時代物の主役が、過去の事件、思い出、心境の述懐などを物語る部分。またその演出。「実盛（さねもり）物語」や、「一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）」の熊谷の物語などが名高い。⑦江戸時代、家々の門に立ち古戦物語の素読をして金品を乞うた者。*随筆・守貞漫稿一六「物語 古戦物語を読み其意を説候者にて当時社地杯には無_レ之家々の門に立本説致候」⑧近代文学で、ノベル（小説）に対し、一貫した筋を持つストーリーという概念にあてた語。また、・・・について述べたもの、の意で、題名に添えられることが多い。〔発音〕モノガタリ〔標ア〕㊦〔ア史〕

平安〇〇〇〇●〇江戸●〇〇〇〇〔京ア〕㊦〔古辞書〕字鏡・色葉・名義・和玉・文明・易林・書言

この「辞典」の意味分類で、必要と思われる「①」から「⑤」までの語意を考え、「源氏」に用いられている全用語に検討を加えていくと、明確に分類し割りきることが困難で、問題になることがらも多い。そして、それは、「辞書」という平均的、客観的な叙述と、実際に使われている具体例との間に存在する相違というようなものではなく、むしろ物語作者の用語意識、言葉を操るしたたかな態度と深く関わる問題でもあるように考えられてくる。

II

〔1〕「物語」とその複合的語の用語例

(1)、左馬頭の詞。意味分類「⑤」。(2)、頭中将の詞。意味分類は「①」であるが、以下の話は、歌語り、歌物語の形で語られていく。「①」を通して、物語の作者は一つの「物語」をつくり出そうとしている。こういう用例は、やはり、

「①」「⑤」という形で示さなければならぬ。(3)、地の文、「任国の話」などと現代語訳する。意味分類の「④」で、「④」「①」と考えるべきである。「①」とすべきでないことは、「湯桁はいくつ」と、問はまほしく思せど」と続くことから明確である。「奥入」(第二次) 定家自筆本(「大成」巻七 370頁)に引歌が注記されている。「伊与のゆのゆけたはいくついさしらすかそへすよます君そしるらん」とある歌は、「歌枕名寄」(「新編国歌大観十巻」角川書店)では第四句が「かずへず」(8859)となつて、「伊与湯 古歌出六花集」の詞書が見える。同書「源氏物語古注釈書引用和歌」437番歌にも同形で重出、さらに同書「六花集注」325番歌に「哀君は知るらめや」の形で重出する。同書、第六巻「六華和歌集」1672番歌に、「伊与のゆのゆけた数は左八右は九中は十六」などと見えている。南北朝期、由阿の撰んだ私撰和歌集である。「歌枕名寄」も、中世以来多く編まれた名所歌集の一つであつた。空蟬との秘められた恋物語を「君ぞ知るらん」、「哀君は知るらめや」と思い、源氏は気恥ずかしくなるといふのであるが、引歌の世界を越えて、伊与の湯、湯桁にまつわる男女の語らいの物語、そういう伝承が存在していたのかも知れない。既に別に指摘したように、空蟬物語は、「古今和歌六帖」の「帚木」の歌に依拠する物語という一面を持っていた。そのように考えていくと、それはただ「任国の話」という意味にとどまるものではなくなってくる。(4)、源氏の心話とも言うべき心中を語る部分。諸本「昔物語」、本文に問題があるが、「江談抄」によるか。やはり、「④」とすべきである。(5)、地の文。源氏が右近に死んだ夕顔の素姓を聞く物語。意味分類の「①」ではあるが、「④」に比重が置かれてもいる。「④」「①」と考えるべきである。資料番号「(1)」「(5)」、帚木、夕顔の巻二帖の用例には、意味分類の「④」「⑤」の意味が共通して使われている。このことは、この物語の構成、構造上の問題に深く関わるもので、物語作者の用語意識として、注意しなければならないことである。

(6)、源氏の心中を語る部分。「①」。(7)、地の文。源氏、葵上の死後、女房達に物語を。「①」。(8)、源氏の詞。世間話

「①」。(9)、地の文。継子いじめの古物語の意で「⑤」。(10)、地の文。源氏が葵上方の女房に物語を、の意。「①」。(11)、地の文。源氏の悲運、不幸を話題とする「①」の意。ただ、四方山話というのではなく、源氏の宿世、その内面に深く関わるものとして「①」(④)「」。 (12)、地の文。六条御息所の住まれる伊勢の国の物語を、使者の侍に。これも、「①」(④)「」で、ただの四方山話ではない。(13)、地の文。姫君の乳母が、明石の御方に「聞きがいのある世間話などを語って聞かせ」る意で「①」。「大臣の君の御ありさま、世にかしづかれたまへる御おぼえのほども、女心地にまかせて限りなく語り尽くせば、」とあるから、これも、世間の四方山話ではなく、やはり、「①」(④)「」と考えなければならぬ。むしろ、女人の物語のありようを示すものとして注意しなければならぬ。(14)、地の文。「なんということもない古歌とか物語といったような慰みごと」と現代語訳されている。意味分類「⑤」の意。(15)、地の文。頭注に「生活に関する深刻な話題はもとより、ちよつとした世間話さえしない」(『全集』(2)蓬生327頁、脚注に「(末摘花は)貧乏暮らしの愚痴の一つさえ、相談申しあげることがおできにならない」(『新大系』二142頁)とある。「ちよつとした世間話」も、「貧乏暮らしの愚痴」も同じと言えば確かに同じであるが、やはり、文脈を辿って注意深く読んでいくとかなり違った意味を表わしている。それは、ただ意味分類の「①」の意とは考え難いように思われる。「かひなき世」は、源氏の営む御八講が、「生ける浄土の飾りにおとらず」、仏・菩薩の化身を思わせる身が、末法の世の汚濁の現世に現われたのか、思いあぐねる兄禪師の思いの世界に対比する「世」、宿業を背負いながら生きる現世の物語であり、末摘花の苦惱を救うゆかりの物語なのであった。それは、資料「14」の「ふるうた」「ものがたり」による救いと対偶するものであり、末摘花の絶望的な救い難い世界を重ねて強調しようとするものだった。やはり、こういう対比の物語的構造を理解していかなければならないはずである。「①」(④)「」とすべきである。この「15」の用例は、さらに、次の資料「16」の用法に深く関わっていく。(16)、地の文。鄙の別れ、須磨謫居の苦難の物語で、意味分類は「④」、または、「④」(①)「」である。

これら蓬生の巻の用例が、やはり、深く関わりあいながら、一つの用語意識に貫かれて用いられていることは注意すべきことである。

(17)、地の文。意味分類「⑤」。(18)、「(17)」に同じ。(19)、地の文。「①」の意。(20)、「(19)」に同じ。

(21)、地の文。右近が、玉鬘に仕える三条と話を。意味分類は「④」の意。(22)、地の文。右近が、乳母に。「(21)」と同じく玉鬘の将来について。「④」の意。(23)、地の文。右近の話。意味分類「④」。(24)、地の文。源氏が紫の上に夕顔との物語を。やはり「④」。

(25)、地の文。「全集」は、「昔や今のありふれた物語」。空蟬が「いにしへよりも、もの深く恥かしげさまさりて」いる様に、出家しているとは言え、源氏は男女関係を断ち難い思いがする。色めかしい戯れ言を言いかけるわけにもいかず、「おほかたの昔今の物語をしたまひて」というのである。意味分類「①」には違いないが、その中に「④」の意が込められてもいた。「①」ないし「①」(④)。「(26)、地の文。「全集」は「世間話」の意。この段の末尾は「あながちにも聞えたまはず」となっていて、「御座なども別々にて大殿籠る」花散里を、源氏は強いてお召しにならない、「聞えたまはず」というのである。「物語など聞えたまひて」とあるのはこの段の冒頭で、「大臣はこなたにて大殿籠りぬ。」とある最初の文章に続く部分。源氏の「兵部卿の宮」などの話に続いていく。微妙に意味分類の「②」と「④」との間に揺れている部分で、「物語」の語を操る物語作者の用語意識はしたたかである。「全集」のごとく「①」のように一見されるが、「①」(②・④)と解さなければ、花散里の「二人の仲らい」の奥深い意味は読み解けないのではないか。そこには、したたかな用語意識が秘められている。

(27)、地の文。「(28)」、「(29)」、源氏の詞。以下、資料番号「(31)」までは螢の巻の用例。(27)、「⑤」の意味分類。螢の巻の「物語論」の章段でこの語例が用いられる叙述の前では「古事」と言われ、「(27)」の後にも「古事」の語が「さてかかる

古事のなかに「全集」205頁など用いられている。岩波の「新大系」も「古事」。原本の表記とは別であるが、本校訂の立場からは「古語」の漢字を当てなければならぬことは「今昔」、「大漢和」などによって、すでに指摘したごとくである。些細な本校訂上の問題のように見えるが、実は「物語」と言う語の根幹、基層に関わる重要な認識、問題を欠落していると言わなければならない。「物語」の発生、歴史、漢文的表記に対するしたたかな認識を明確に持っていた物語作者の用語意識や用字法からすれば、「古語」の表記以外は絶対に存在し得ないのである。(27)の意味分類は「⑤」。「新大系」脚注に「古事は物語」とある。「全集」「古物語」。(28)、源氏が自分自身を「律義な愚か者」の物語の主人公として戯画しながら口説こうとする。新しい「物語」創始を意図。「28」、「29」ともに源氏の詞「④」「⑤」。「⑤」はそれを物語に仕立てる意。意味分類は「⑤」(④)。「30)、地の文。「物語」草子を指す。「⑤」。「31)、源氏の詞。「⑤」で意味分類は「30)」に同じ。(32)、源氏の詞。「めづらしき事とて、うち出できこえむ物語」、世間話ではあるが、「このころ世にあらむ事の、すこしめづらしく、ねぶたさ醒めぬべからむ」物語というのだから、資料番号「28)」などと深く関わる。源氏が、「何となく翁びたる心地して」というのは、「全集」頭注に「源氏は若者たちが気楽に口をきけるように、世間話を楽しむ老人のような言い方をしてみせた(3)216頁」と注記するが、それだけではない。「翁の物語」に仕立て直す戯れごとの意が込められた戯画化が企てられてもいる。ただ「①」の意ではない。「①」(④)「④」なのである。「28)」と微妙に関わる物語の意味を読み解いていく必要がある。(33)、地の文。内大臣の母、大宮の「幸ひ人にすぐれたまへる御ありさま」を、その境涯をたたえ、その座の話題とする。「④」(①)「①」ないし「④」とすべきである。

(34)、地の文。「全集」現代語訳に「世間話などをなさる。」と、「①」の意に解する。これに続く直後の本文「これもうちとけぬるはじめなめり」とある「これ」は、頭注にもあるように諸説があり、「物語」の内容に深く関わってくる。「新大系」脚注には、「紫上と明石君とが仲良くおなりになったきっかけであるようだ。」(三190頁)とある。それによれ

ば、「世間話」と解するのは不適切である。「紫上、明石君と対面」のこの章段は、紫上が養母となつて、姫君との離別八年が過ぎてゐる。以下続く叙述にも、その人がら、境涯が語られ、叙述の照応からも「④」「①」ないし「④」と考へるべきである。それは、次元の高低を異にしながら、資料番号「33」の用例と微妙に関わる用語意識さえ見られる。(35)、地の文。夕霧と雲居雁との幼い日の恋の物語。「自分たちの思い出話」には違ひないが、意味分類の「①」に終るものではない。それは、「④」と深く関わっている。「④」「①」ないしは「④」と解すべきである。

(36)、夕霧の詞。「全集」現代語訳に「内輪の、しかるべき打明け話」(4)17頁)とする。源氏の語る話を夕霧が朱雀院に謙譲の意をこめて言う部分。表向きの意味は、「私的な語り」を指す。だが、それが「内々の」物語として、公的、政治的現実からは離れた物語だと謙遜して表現しているのであって、「物語」そのものの意味にそういう語意があつたのではない。意味分類は「①」「④」で、そこには、逆説的表現の意図が込められてゐる。(37)、地の文。女三宮降嫁に不安を感じ心配する女房達の話題を紫上がかえさせようとして明るく振舞い語る。「①」。(38)、地の文。「全集」現代語訳「世間話」。柏木は妹の女御と語り、女三宮への思いを慰めようとする。恋に苦悩する柏木は、心幼い女三宮の軽率さに気づかない。「物語」の語は、それをアイロニカルに逆説的に捉えてゐる。意味分類は「①」。(39)、地の文。紫上は夜離れの孤愁を女房達に気づかれないように物語を読ませる。「⑤」。資料番号「37」と対応する用語例。

(40)、地の文。若君薫五十日の祝儀の段。幼児の片言。意味分類は「③」。

(41)、地の文。夕霧が落葉の宮の女房達に語る。話の内容はこの語の直後に続き、宮への胸中を訴えている。「①」「④」。(42)、地の文。夕霧は落葉の宮に胸中を訴える。亡き柏木を追慕し、強いて「さまよふのどやかなる物語」を語る。意味分類「④」。(43)、地の文。「全集」本は「昔物語」。「新大系」「むかしの物語」とあるのに従う。意味分類は「⑤」。(44)、地の文。御息所の消息を雲居の雁に奪ひ隠されてしまった夕霧は籠絡しようと機嫌をとる物語。「①」ないしは「①」

〔④〕の意。(45)、幻の巻で地の文。「全集」現代語訳「古い思い出話」〔4〕508頁、「④」の意。

(46)、薫の詞。「全集」現代語訳に「所在なくばかり過ごしております、その世間話」〔5〕134頁とある。所在なく憂愁を抱いて生きている薫の話が、意味分類「①」の世間話であるはずがない。「④」。(47)、地の文。弁の尼の物語。意味分類は「④」。(48)、地の文。八宮が自分の死後、姫君のことなどを薫に語る。やはり、「④」。(49)、地の文。「④」と同じで「④」。ただこれらは「昔物語」とも言われ「④」〔⑤〕ともいうべきものでもある。(50)、地の文。薫が慎み深く思慮深く姫君に語る物語。やはり、「④」。(51)、薫の詞。無常なる現世の物語。「④」。(52)、(53)、地の文。薫が八宮邸に宿り、姫君と物語る。「④」ないしは「④」〔②〕の意。「②」は状況設定だけで、具体的には進展せず逆。

(54)、地の文。匂宮の供人と八宮邸の侍女との語らい。「②」の意。

(55)、地の文。薫、大君を偲び、侍女に物語をさせる段。「全集」現代語訳は「世間話」。侍女達の話が直接話法で以下続いている。大君苦悩の追慕の挽歌ともいうべき物語で「全集」は誤り。やはり、「④」と考えなければならぬ。(56)、地の文。意味分類は「⑤」。(57)、薫の詞。弁の尼君と大君を偲ぶ追慕の物語。「④」。

(58)、地の文。中君の若君。「③」。

(59)、地の文。弁の尼君が、大君追慕の物語を。やはり、「④」の意。(60)、地の文。本文の解釈に問題があるが、庚申の夜、歌合をしたり、物語を読んだり、作ったりしたと解し、「④」または、「⑤」と解すべきか。(61)、地の文。「全集」現代語訳「長年の積もる話」〔6〕43頁、「④」。(62)、地の文。亡き大君を思慕する物語。「④」。(63)、地の文。中君が浮舟に「物語いとなつかしく」語る。「④」。(64)、地の文で、「〔63〕と同じ」。「④」。

(65)、地の文。「全集」現代語訳に「女君にお話などを申しあげられるそのついでに」〔6〕153頁とするが、「お話など」は、意味分類では「②」〔①〕とすべきである。

(66)、地の文。「物語」草子の意。「⑤」。(67)、地の文。「全集」現代語訳「世間話」。ただ「世間話」と見るのは誤り。浮舟物語が秘められ、「④(②)」。(68)、地の文。「全集」現代語訳は、ここでも「世間話」。薫、女一宮を慕い中君のもとにまいる段。やはり、「④(①)」で、話の内容はこの章段のなかに語られている。(69)、地の文。大納言の君の詞。意味分類は「②」で、「全集」現代語訳「ねんごろにお話をなさって」。(6)246頁。

(70)、地の文。女房達のひそひそ話。「①」ないしは「①(④)」「④(①)」というところか。話題を限定することは困難のように思われる。(71)、地の文。「全集」現代語訳「世間話」(6)277頁。「下人來たり八の宮の姫君葬送のことを語る」段の下衆の物語を指す。浮舟事件の世間話には違いないが、ただそれだけではない。やはり「①」ではなく、「④(①)」。話題が明確に限定されている。(72)、地の文。小野の里で老い人どもが「艶に歌よみ」過去を回想して物語る。浮舟の憂愁孤独な独白歌二首の間に挿み込まれた部分。「④(①)」。(73)、地の文。僧都の妹尼と女婿中将との物語。「(72)」と照応する現実の世界。「④(①)」。

(74)、地の文。禪師の君の話。「腹臈ない禪師の話」に引かれて、という意。「①」。(75)、地の文。女婿中将が話のついでに。「①」の意。(76)、女婿中将の詞。「全集」現代語訳「はかないこの世の話」(6)341頁)。この語は、「御物語」の資料番号「(75)」の浮舟の詞「心深からむ御物語」に対応する。「全集」頭注に「何が中将の言う「はかなき世の物語」か、また逆に「心深からむ御物語」か、その区別もつかない頼りない女なので、むずかしいことを言われてもわからないからだめ、と先手を打った。」とあるのは誤り。浮舟に心ひかれ恋慕する中将は、出家している浮舟に表向き「無常なる現世の物語」と言っているに過ぎない。その裏側、心の中では「はかない男女の愛の物語」の意を込めている。中将の底意を見抜いている浮舟は、それを「心深からむ」と、アイロニカルに戯画化して捉え直している。だから、「この厭ふにつけたる答へはしたまはず。」というのである。意味分類は「④(②)」。(77)、中宮の詞。「全集」現代語訳「なんと

いうことない世間話。「①」の意。(78)地の文。「全集」現代語訳「話などをなさる折」。薫と小宰相とは情を交し合っている仲。「②」「④」と考えるべきである。

(79)浮舟の詞。「全集」現代語訳「世間話」。手習の巻「二七 紀伊守小野に來たり、薫の動靜を語る」物語を承ける。やはり「④」「①」と考えるべきである。(80)地の文。小野の里の妹尼が小君に語る話。「全集」現代語訳「お話を少し申しあげて」。以下妹尼が語る物怪の取りついた話で、話題が明確。「④」「①」。

つぎに、複合的語などの用例について検討を加える。(84)地の文。落葉の宮の母御息所が、夕霧に柏木の思い出話を。「④」。(85)地の文。夕顔在世中の物語。「④」。(86)地の文。源氏が伊予の介、空蟬などの話を紀伊の守に。「④」。(87)地の文。夕顔の通夜に招かれた念仏法師達の話。死者の身の上か、限定し難い。「①」「④」。(88)地の文。夕霧と柏木の会話。「④」。(89)地の文。物怪の詞が長く続き、その話の内容を指す。やはり「④」。(90)地の文。大臣が葛城山の行者と語る。柏木の病氣平癒の加持祈禱。「④」。(91)地の文。薫出生五十日の祝儀の段。「③」。(92)地の文。女房達が話相手をする。「①」「④」。(93)地の文。宇治八宮が、聖だちたる阿闍梨に出家の絆など隔てなく語る。「④」。(94)地の文。中君の御子若君が。「③」。(95)地の文。薫が弁の尼に。浮舟への仲介を頼む。「④」。(96)地の文。宿守の男が時方に報告する。「④」。(97)地の文。「全集」現代語訳「何かと一日語りつづけて」(6145頁)とあるのは誤り。「語らひ暮し」とある句宮と浮舟のむつごと、従者である大夫と侍従との物語は対応、対偶的に語られる。「②」。(98)地の文。「全集」現代語訳に「世間のよもやま話」(6299頁)とあるのは適切でない。「夜一夜遊びたまふ」と、山にはあまりふさわしくない詩歌管弦が催される。中将と僧都との間には、妹尼の女をめぐる尽きぬ思いの物語がある。「遊び」には、慰撫鎮魂の思いが込められてもいたに違いない。やはり「④」「①」。「④」(①)、「その思いが資料番号」(74)に深く関わっていく。「①」①と解したが「④」の意をもその奥に秘めてもいる。

13	12	11	10	9	
⑤ ④	⑤	② ④ ④ ②	④ ⑤	④ ①	
* (29)	(66) (1) . * (9) . (14) . (17) . (18) . (27) . (30) . (31) * . (39) . (43) . (56) .	(67) . * (76) . (78)	* (28)	(99) (3) . (5) . (33) . (34) . (35) . (68) . (71) . (72) . (73) . * (79) . (80) .	(97) (63) . (100) (64) . * (84) . (101) (85) . (109) (86) . (88) . (89) . (90) . (91) . * (94) . (96) .
1	12	3	1	12	
1	12	3	1	12	

〔2〕「御物語」とその複合的語の用語例

(1)、地の文。左大臣が、婿の源氏にお話を。「①(④)」。(2)、地の文。僧都が、源氏に山に籠っている間のお話を。「①(④)」。(3)、地の文。僧都が、源氏に「世の常なき御物語を」。「④」。 (4)、地の文。源氏が、父帝に「日ごろの御物語」を。「④」。 (5)、地の文。源氏が、藤壺に「おほかたの御物語」を。「全集」現代語訳に「さしさわりのない世間話」とあるが疑問。恋しい源氏の心中を表に出さず、強いて取り繕って語る。公事にことよせ、関わらせる物語の意。「①

④」。⑥、地の文。源氏が兵部卿の宮に。心をこめたお話。「①」「④」「⑤」「⑥」には、その裏に「②」の意味を挿入している。⑦、地の文。源氏が、紫の君に「日ごろの御物語を」。「④」。⑧、地の文。三位中将が、源氏のもとに参上、「まめやかなるも、また例の乱りがはしき」御物語を語る。「全集」現代語訳に「世間話など、まじめなことも、またいつもの好色がかつたことをも」(2)48頁とある。その果ては無常なる現世を涙して語り合うという。「④」。

⑨、地の文。源氏が、藤壺のもとに参上、亡き桐壺を偲ぶ昔物語をの意。やはり「④」。⑩、地の文。源氏が、朱雀帝のもとに参上、「昔今の御物語」を語る。「④」。⑪、地の文。源氏と朱雀の帝が。文の道、歌語り、齋宮下向の日などの物語を語る。「④」。⑫、地の文。源氏が、麗景殿の女御に桐壺帝在世中の物語を語る。「④」。⑬、地の文。左大臣が、源氏に「昔の物語、院の御事、思しのたまはせし御心ばへ」などを語る。「④」。⑭、地の文。「⑬」と同じ。左大臣の「多くの物語」。「④」。⑮、地の文。螢兵部卿の宮が、源氏に須磨への離別の最後の物語を。「④」。⑯、地の文。「源氏、花散里を訪れて懐旧の情をかわす」段。源氏が花散里にの意。「④」。⑰、草子地。藤壺と源氏との話。春宮冷泉のことなど。「④」。⑱、地の文。「全集」現代語訳に「日が暮れるまで女君にゆっくりとお話をなさって」(2)176頁とあるが、誤りだろう。やはり「②」「④」。

⑲、大宰大弐の消息文。源氏の都のお話をの意。「④」。⑳、地の文。宰相の中將、須磨を訪れ語る。「月ごろの御物語」。「④」。㉑、地の文。明石の入道が、源氏に娘への期待をうち明ける物語。「④」。㉒、源氏の詞。「㉑」の明石入道の物語を指す。「④」。

㉓、地の文。「源氏参内して、しめやかに帝と物語をする」段。「④」。㉔、地の文。花散里を訪れ、姉麗景殿の女御と語る。資料番号「12」に照応、対偶する物語。「④」。㉕、地の文。朱雀院が源氏に。「④」。

㉖、地の文。明石の御方が、源氏に「月ごろの御物語」を語る。「④」。㉗、地の文。桂の院落成の宴。「け近ううち

静まりたる御物語」は、やはり、「④」。(28)地の文。源氏が、紫上に語るその大井の山里の物語。「④」。

(29)藤壺の詞。源氏に「昔の御物語」を。「④」。(30)地の文。冷泉帝が、源氏と「しめやかなる御物語」を。「④」。

(31)地の文。源氏が故式部卿の宮邸に女五宮を訪ねる。宮が対面、お話になられる。「④」。(32)源氏の詞。「③」と逆で源氏が女五宮に語る。「④」。(33)地の文。女五宮方でお話を。「例の御物語」。やはり「④」。(34)地の文。源氏と紫上とが、「昔今の御物語」に夜がふけていく。雪の夜、紫上と昔今の女人達の評をかわす物語。「④」。

(35)地の文。大宮が、内大臣に幸い人明石の御方の琴をめぐる話など。「④」。(36)源氏の詞。親めて玉鬘に「年ごろの御物語」を語ろうとする。「④」(②)。「③」(37)地の文。「古年の物語など、なつかしく聞こえたまひて」を、「全集」頭注は「花散里に預けた玉鬘のことが話題の中心であつたろう。」(314頁)とするが、「西の対へ渡りたまふ。」に引かれた解釈で誤り。玉鬘を六条院に引き取つたのは源氏三十四才、この物語は三十六才の正月、夕顔の物語を含めてというのは無理だし、花散里との関係を語る直前の文脈からも無理。「御物語」の語が、「昔」の語を伴う意味で用いられていることが注意される。「④」(38)地の文。侍女達は、源氏と玉鬘との話に遠慮してその場を少し離れる。玉鬘への慕情を告白する物語へと続く段。「③」(37)と同じで「④」(②)。「④」。

(39)地の文。大宮が、内大臣と雲居の雁の件を語る。「④」(40)地の文。源氏と内大臣との「昔今の事ども、年ごろの御物語」。「④」(41)地の文。源氏が玉鬘に語る「こまやかなる御物語」。この形容動詞は「③」にも使われ、対応する表現。やはり、同じで「④」(②)。「④」(④)「④」に近づいている。

(42)地の文。内大臣と正客夕霧との藤の宴の儀礼的な正式の話題。「④」(43)地の文。「朱雀院、女三宮の将来を春宮に依頼する」段。東宮と朱雀院との「年ごろの御物語」。「④」(44)地の文。朱雀院が、夕霧を御簾の中に召し入れて意中をほのめかし語る。「④」(45)地の文。朱雀院が、源氏に。これも「昔今の御物語」。「④」(46)地の文。源氏

と紫上とが、「過ぎにし方行く先の御物語を。」④。(47)地の文。源氏と玉鬘とが、四十賀で語る。④。

(48)地の文。源氏が二条宮を訪れ、ひそかに朧月夜と逢う段。二人の語らいの意。②。(49)地の文。明石の姫君と紫上との交わす話。「全集」現代語訳に「世間話などを、まことにやさしくお話しあいになられてから、」(4)84頁)とある。「いとうつくしげにおとなびまさりたまへる」姫君に「いとなつかしく」話し交わす物語が「世間話」であるはずがない。話題を推し量れなくなっている現代人が、次元がわからぬままにそう決めつけてしまっているに過ぎない。

④。(50)地の文。紫上が女三宮に。これも④⑨と全く同じであるが、「全集」もさすがに「世間話」とはしないで、「宮にお話などを」とする。④。

(51)六条御息所の物怪の詞。源氏が紫上との睦言に御息所を話題にしたこと。②④④「ないしは」④②「であるが、執念き業苦を中心に据え、前者と見るべきか。(52)地の文。源氏が女三宮と。「昼の御座にうち臥したまひて」は、「語らひたまふ」の文が先行し、二条院の紫上を見舞うための休養であるとは解し難い。「すこし大殿籠り入りにけるに、」とあるのは、やはり女三宮との情事を物語る語と考えるべきだと思ふ。女三宮の歌「夕霧に」の第五句「起きて行くらむ」の「らむ」の原因推量は、そういう物語の場と深く関わる用法である。②④④「ないしは」④②②「の意。

(53)柏木の詞。岩波「新大系」脚注に「静かな親子のお話し合い」(三402頁)とある。④。(54)地の文。夕霧が、源氏に。柏木の存命中、死後などに関わる話題。④。(55)地の文。源氏が、秋好中宮を訪れ、物語る。④。(56)源氏の詞。秋好中宮に、「過ぐる齢にそへて忘れぬ昔の御物語」を。④。(57)地の文。紫上と明石中宮とのお話。④。(58)地の文。中納言の君や中将の君が、紫上追慕のお話しを。ともに、源氏の愛した女人達。④。(59)地の文。源氏が、明石の御方と「昔今の物語」を。「全集」現代語訳に、「思い出話や世間話」とあるのは、やはり、誤り。紫上への

挽歌を主軸とする物語。「④」である。

(60)、地の文。夕霧が玉鬘に。「④」。(61)、夕霧の詞。玉鬘に、源氏をめぐる昔話をの意。「④」。(62)、地の文。玉鬘は姫大君の冷泉院参内のご挨拶を女御のもとに参上してお話しになるの意。やはり「④」の意。

(63)、弁の尼の詞。薫に昔語りをする。「④」。(64)、地の文。薫が、匂宮に「例の、さまざまなる御物語」を語る。「④」。

(65)、地の文。薫が、大君に無常なる現世のお話などを。「④」。(66)、地の文。薫と匂宮とが語り合う。「全集」現代語訳に「世間話を交わされる」(5)250頁とあるが、宇治の八宮の姫君をめぐる話題で、世間話というようなものではない。「④」。

(67)、地の文。「匂宮、女一の宮に戯れ、女房とも浮気する」段。物語の話題は、以下の叙述で語られていく。「④」。

(68)、地の文。薫と匂宮とが、姫君達をめぐる物語をの意。「④」。(69)、薫の詞。中君に、大君の思い出話を。「④」。(70)、

地の文。大君をめぐる愁いに沈む中君と薫との物語。「④」。(71)、地の文。匂宮と薫とが交わす物語。「④」。(72)、薫の詞。中君に語る「まめやかに聞こえさせ承らまほしき世の御物語」。「④」。(73)、薫の中君への消息文。八の宮邸を堂にといような話題。「④」。

(74)、地の文。匂宮が、明石の中宮に退出していた間の宮中のお話を。「④」。(75)、浮舟の中将に対する詞。「物語」の資料番号「76」で既に指摘した。「④」。(76)、地の文。薫が明石の中宮にお話しをの意。「④」。

(77)、地の文。源氏が師の宮に「昔の御物語」を語る。「④」。(78)、地の文。源氏が内大臣に「昔今のとり集め聞こえたまふ」物語のついでにの意。「④」。(79)、地の文。源氏の賀宴に「昔の御物語ども」に花が咲いての意。「④」。(80)、地の文。紫上の見舞いのため退出した中宮のもとに、明石の御方も参上、「心深げに静まりたる」御物語を交わす。「④」。

(81)、地の文。弁の尼が、薫に女三宮と柏木との「昔今をかき集め、悲しき御物語ども」を語る。「④」。(82)、地の文。薫と匂宮とが、宇治の山里の姫君のお話などを語る。「④」。(83)、地の文。夕霧が語る「昔の御物語」。花散里に養育さ

れたりした思ひ出。〔④〕。

(103) 地の文。桐壺の帝が、更衣亡き後、親しい限りの女房四、五人をお側にして追慕回想の物語を。〔④〕。(104) 地の文。異文「昔物語」。源氏が、昔の思ひ出話を。〔④〕。(105) 地の文。源氏が語る話。「全集」現代語訳に「世間話などをなさる。」ここもただ「世間話」というのではない。明石の女御と若宮が退出した六条院の閑居のなかの述懐である。

〔④〕。(106) 地の文。螢兵部卿の宮がお話しを。「全集」現代語訳に「世間話」。風流の人師の宮がけまりの日に語る話で、それが「世間話」というような域、内容にとどまるものではない。〔④〕。(107) 地の文。紫上の死後親しい女房達を相手に、源氏の語る述懐。〔④〕。(108) 地の文。薫が僧都に。「全集」は現代語訳で「心のこもるあれこれの世間話」(6) 359頁とするが、頭注に「弘法に関する話題を含むだろう。」とする。やはり、「④」である。

「御物語」とその複合的用語例は「総索引」によると、以上の八十九例である。これらの全用例を「物語」とその複合的語に準じて分類、集計すると、次のごとくである。消息文も会話の用例に含める。

番号	意味分類	資料番号	計	百分率
4	④	(28) (16) (3) (18) (48) (1) (2) (5) (6) * (29) (17) (4) * (51) * (52) (30) (19) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) * (31) (20) * (32) (21) * (33) (22) * (34) (23) (24) (25) (26) (27) (35) (24) (37) (25) (39) (26) (40) (27)	78	87.6
3	② (④)	(18) (48) (1) (2) (5) (6) * (51) * (52)	3	3.4
2	②	(48)	1	1.1
1	① (④)	(1) (2) (5) (6)	4	4.5

5	
④ ②	
* (36) · (38) · (41)	(107) (77) (67) * (42) · (56) (43) (108) (78) (68) (57) · (79) * (69) (58) (44) · (80) (70) (59) (45) · (81) (71) (60) (46) · (82) * (72) (61) (47) · (83) * (73) (62) (49) · (103) (74) (63) (50) · (104) * (75) (64) (53) · (105) (76) (65) (54) · (106) (66) (55)
3	
3.4	

〔3〕 歌物語（伊勢）・〔大和〕・〔平中〕の用語例

勉誠社「歌物語総合語彙索引」によって調査、検討を加えると次のごとくである。〔全集〕による。

(イ) 「伊勢物語」

(1) むかし、男、あひがたき女にあひて、物語などするほどに、とりの鳴きければ、

いかでかはとりの鳴くらむ人しれず思ふ心はまだ夜ぶかき(五三段・177頁)

〔全集〕現代語訳「思うことなどを話しあっているうちに」。意味分類「②」。

(2) 女いとしのびて、ものごしにあひにけり。物語などして、男、

ひこ星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ

この歌にめでてあひにけり。(九五段・215頁)

意味分類「④」②。

(3)ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせたまひぬ。夜ふくるまで酒飲み、物語して、(八三段・204頁)

意味分類、「④」。

(ロ)「大和物語」

(4)これらは物語にて世にあることどもなり。(百六六段・416頁)

「各段章を独立的に鑑賞するようになってからの書写者のさかしらであろう。」(『全集』頭注)といわれる。「⑤」。

(5)この大徳のすむ所に来て、物語りなどしてうちやすみたりけるに、衣のくびに書きつけける。

白雲のやどる峰にぞおくれぬる思ひのほかにある世なりけり。(百六八段・苔の衣425頁)

人生の半世を語る物語か。「いろいろの話」。「④」。

(6)夜ふけぬれば、これかれ酔ひたまひて、物語し、かつげ物などせらる。(二九段・289頁)

亡き式部卿を偲ぶ物語。「④」。

(7)よろづの物語し、世の中のはかなきこと、世間のことあはれなるいひひて、(四一段・295頁)

この物語は、やはり「④」。

(ハ)「平中物語」

(8)また、このおなじ男、女どもありけり。それ来にけり。夜ふくるまで、物語などして、帰りていひたる、

さ夜ふけて嘆き来にしをいつの間に夢に見えつつ恋しかるらむ(一〇段・484頁)

「見れど逢わぬ恋」ということになっているが、それは表向きのごとで、二人だけがわかり合っていればよい、第三

者にはわからないように書くというのが本道であった。そういう男女の語らいを基層とする物語でもあった。〔④ ②〕
ないしは、〔② ④〕。

(9) 寺にまうで着きても、男の局、女の局近くなむしたりける。かくて、物語などあまた、をかしきやうにかたみに
いひければ、(二五段・505頁)

「歌のしるべ」の段。〔④〕。

(10) 「いざ、西の京わたりに、時々ものいふわたりに、物語などせむ」とて、いざなひければ、(二五段・507頁)
会話文。〔④ ②〕の意。

(11) 男も女もいひかはして、をかしき物語して、女も、心つけてものいふありけり。(二二段・499頁)

意味分類は「④ ②」。

(12) さて、また、こと友だちどもぞ来たりける。世の中の物語どもなどしていふ。(一段・464頁)

〔④〕の意。

「歌物語」(伊勢・大和・平中)の用語例は以上の十二例である。これらを、「源氏」の用語例に準じて分類、集計すると、次のごとくである。

番号	意味分類	資料番号	計	百分率
1	②	伊・(1)	1	8.3
2	④	伊・(3)・大・(5)・大・(6)・大・(7)・平・(9)・平・(12)	6	50
3	④ ②	伊・(2)・平・(8)・平・(10)・平・(11)	4	33.3
4	⑤	大・(4)	1	8.3

「物語」、「御物語」とその複合的語の用語例について、比較、検討を加えてきたが、それらを通して考えられることがらを要約し、さらに展望すると、次のごとくである。

「歌物語」で「物語」の語が用いられる場合、男女の語らい、睦言の意を伴うものがほぼ半数に達する。恋を主題とする和歌の歌語りから発生、形成され、発展していった「歌物語」の世界は、「語らふ」場を基層とする文学であった。用語例として、「②」の意味を伴うものであった。そして、さらに、世間話とか噂話とかいうような、漠然とした一般的な話題の物語ではなく、その内容、話題が、かなり明確で、はっきりとしている場合に用いられている。このことは、「源氏」の「御物語」の用例に顕著に見られる。貴人の語る「物語」であり、貴人に語って聞かせる「物語」であった。この語は、物語の内容、話題が、きわめて限定された意味で使われている。その意味分類は五つの類型に分類されるが、「3」と「5」は、「源氏」「物語」の意味分類では「11」として一括してある。貴人に関わる「物語」は、やはり、それなりの内容、話題を持つ必要があったと考えなければならぬ。貴族的文学として、やはり、それにふさわしい、相應の内容が求められたのである。そして、貴族生活そのものもそういう習慣、慣例を持ってもいたのである。そのいくつかの用例が、昔、過去の思い出、回想の物語であったことは、指摘したごとくである。そして、そのことは、直接的にそういう類の語を伴うことがなくても、そのような話題であったことを逆に類推させるいくつかの用例も存在することを示している。用語意識の問題の一つが、そういう使用語彙と深く関わっていることに、やはり注意を向けていく必要がある。

「歌物語」の用語例のほぼ半数が、男女の語らい、睦言の意味の「②」の意を伴っているのに対して、「源氏」「御物語

「語」の用例は、七例に過ぎず、8%にも達しない。そのことは、貴人に関わる物語という、物語の内容、話題と深い関係をもつだけではなく、「歌物語」と「源氏」という、文学形態のもつ本質にも深く関わるものでもある。「物語」と「御物語」の語彙が、そういう位相性を語として持っているという視点は、従来の辞書類は全く考慮に入れることができなかった。同一語形の形容詞と形容動詞では、やはり、意味表現に位相性を持つかと思われるものも存在するが、その記述さえ欠落している「辞書」類も存在する。

「御物語」が、世間話、噂話というような、漠然とした一般的な意味で用いられている語例はきわめて少なく、四例、4.5%にとどまっているという事実は、やはり、注意しなければならないことである。これに対して、「物語」の語例は、意味分類として、そのように考えられるものが一四例、14%あり、「御物語」より9.5%高い。その他、その意味を伴うものを含めると、三九例、39%に達する。全用例に対するこの高い比率は、やはり、注意しなければならない事実でもある。また、男女の語らい、睦言の意を含むかと思われるものは八例、8%で、これは、「御物語」とほぼ同じ数値となっている。だが、確かに世間話、噂話など、意味分類の「①」の意を含むものは、そのように高い比率を占めているが、「④」の意を含むという視点に立つと、その用例数は六五例、65%にも達する。「御物語」の用例数を、これと同じ視点から見ると、やはり八八例98%にも達している。むしろこういう事実に向けよう必要がある。「伊勢」「大和」「平中」というような「歌物語」、「源氏」の「物語」の用語例が、従来考えられてきたように、「世間話」、「噂話」というような意味分類「①」に中心が置かれていない、その用語例を比較、検討すると従来の考え方に誤りがあった、「④」の側にこそその用語意識の中心が傾いて据えられているという事実を、注意深く読み解いていく必要がある。

「物語」「語」と表記される「モノガタリ」の最も古い語例は「万葉」であり、しかもそれらの二例は、いずれも

『柿本人麻呂歌集』所収歌である。大修館『大漢和』によっても、「物語」の語は、漢籍にはなく、それに相当する語は「語」であったと推定される。このことについては、既に冒頭で指摘したごとくである。「万葉」の表記が「語」であり、「今昔」のタイトルの表記が「語」である事実を考えるべきである。漢文的表記とその周辺の世界に属する「記」「紀」に「物語」の用語例を探ろうとすることは事の本末をわきまえない徒勞であると言わざるを得ないように思う。やはり、それは、方法論として誤りであると思う。「物語」の語は、「人麻呂時代」という歴史のなかでこそ、それが、創始される蓋然性が、きわめて高かったと思量される。それは、「人麻呂の造語」とも言い換えられるべきものであり、人麻呂の用語意識に強く支えられた「語」であった。

【源氏】螢の巻の物語論で「古事」の語例が二例見えることは、「物語」資料番号〔27〕で指摘したごとくである。「古事」は従来「物語」を指すと考えられてきた。「大成」によれば、諸本「ふる事」と表記、本文異同は見られない。だが、この表記は「ふる語」と解すべきで、「語」が物語を意味する。

- (1) 「かかる世の古事ならでは、げに何をか紛るることなきつれづれを慰めまし。」(新編『全集』(3)211頁)
- (2) 「さてかかる古事の中に、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。」(同、213頁)

これらの用語例は、いずれも源氏の詞のなかに用いられていることに注意しなければならぬ。漢文的表記に深く関わる「語」は、男性のことばとしての位相性をもって使われていたのである。「ふる語」は「ふる物語」「古物語」を意味し、『蜻蛉日記』冒頭の語を意識し、それに照応、対偶するものとして使用された語であったように思われる。『冒頭の文章が、当時多かった架空の伝奇的、超現実的、空想的要素の強い物語を超える「日記文学」、新しい「物語」を創始、創造しようとする宣言ともいふべきものであったことは疑い難い事実である。螢巻の物語論は、従来、「玉鬘」との対話という形で、源氏の本心とも冗談ともつかぬ体ながら、物語を、虚構の中に人間の真実を描くものとして高く

評価する点は動かない。小説虚構論として、今日なお古びることのない新鮮な文学論（新編『全集』(3)213頁 頭注）という見方が、一般的に定説化してきている。それが、誤りであると言うのではないが、ただ、それだけではかたづけられない問題があるようにも思う。「蜻蛉」冒頭の私小説的日記文学、物語的日記文学創始への宣言とも言うべきものに照応、対応、対偶する論理の存在を読み解いていかなければならない、というのも、その一つである。「源氏」の作者は、「蜻蛉」を読み解き、熟知していたと推定してよいように思う。「そらごと」こそ「ふるごと」に照応し、対偶するものだった。この作者が、きわめて高い、そして、深い文学史的知見、史眼を持っていたことは、「歌物語」「史記」などの問題を通して別に指摘した。「ふるごと」を超えようとする意識には、ただ虚構によるリアリティの表現という物語虚構論だけでは論じ尽くすことのできない問題が秘められているように思う。「日本紀」、「ふるごと」を重層的に批評し否定しようとして、さらにそれを止場し、それを越えようとする新しい「物語」の創始に、物語論の前提、基層があるという論理の骨格さえ、やはり、従来読み解いて来なかった、そういう側面があったように思う。「まろがやうに実たなる痴者の物語」というのは、玉鬘を口説く源氏の口上の手始めであるだけではない。そういう読み解き方は、一方的で誤っているのだと思う。帚木の雨夜の品定めで、頭中将が、玉鬘の母夕顔との物語を指して「痴者の物語」と言っている。その詞を考え合わせて見る必要があるように思う。この語は、夕顔を頼りがいのない「痴者」と解して来た。夕顔の人物論として、そういう論点を視座に据えて考えて来た。確かに一見そのように見える。だが、頭中将の詞が源氏を意識し、源氏の詞が玉鬘を意識する謙譲、謙遜の意識が、その基層に共存している事実も、また、見のがし難いように思われる。帚木の巻で、頭中将が主人の源氏を意識しながら三首仕立ての新しい歌語り、歌物語をつむぎ出し、つくり出していく。螢の巻で、源氏が玉鬘を意識しながら、「ふるごと」ではない新しい物語を創始しようとする。ともに、「ものがたる季節」である長雨の季節のなかでそれらが創始され、営まれていく。異郷にさすらう「蔓草」をその身に、

その素姓の標とする夕顔と玉鬘母子が、こうした話型をその背後に背負いながら造形されていく事実には、やはり、注意を向けていく必要がある。螢の巻の物語論は「蜻蛉」、帚木の巻の「物語」から投影、照射という場を離れて読み解くことはできない。そういう論点、視座を欠落することはできないのである。

螢の巻の物語論が、ただ虚構論としての意味を持つばかりではなく、新しい物語の創始、造型という問題に関わっているという事実は、「物語」という語の用語意識と深く関わるものとして、やはり、考えてみなければならぬことである。

意味分類「③」の「幼児が片言やわけのわからないことを言うこと」を「物語」とするのは、巷間の話というような軽い意味から転じていったものだろうか、それともなにか重いような原意をその基層にもつものだろうか。一般的には従来から前者と考えられてきたが、やはり、疑問がある。幼児のわけのわからないことばや片言は、「よしまし」に移された物怪の詞に共通するものがあつた、そう見られていたのではなかつたらうか。「万葉」などに見える「辻占」は、巷間の話を聞いてそれによって何ごとかを占つたものと推定しなければならぬ。「物語ることば」を通して占つた、それは、童が「よしまし」となって語る「物怪の話」、「幼児の片言」に共通するもの、そこには、判じなければならぬ詞として底通する一つの基層を想定していくことができる。そして、語意の源流を、こういう次元に立つて捉え、さかのぼり、辿っていくことができるならば、「もの」が語る、「もの」を語る「ものがたり」の原意を、そういう世界のなかに読み解いていかなければならなくなってくる。やはり、事の本末を明確に据え直さなければならなくなってくる。「源氏」の作者は、「物語」という語に対するしたたかな語史的認識を持っていた作家であつたように思う。物語の発生とその展開、歴史的展望をもしたたかに持ち合わせた「史眼」とも言うべきものをはつきりと持っていた。そして、意味分類「④」に傾いた、片寄りのある用語意識は、そういう世界と深く関わるものであつた。対偶的に、照応しながら、

同じ語彙を重複、重出させるこうした意図的な物語の方法は、和歌の修辭から磨きぬかれていった一つの方法であつたに違いない。